

だいななしょう
第七章

かいもの
買物

つぎ あさ はや お ふる ふく き おんせん
次の朝ゆきは早く起きました。古い服を着てから、温泉の
そうじ はじ おかみ み まちいちばん
掃除を始めました。しかし女将はゆきを見て、「この町一番
さどうか ひつよう - きぬ
の茶道家がそんなことをする必要はありません。さあ、絹の
きもの きか か もの い しんじゅ わす
着物に着替えて買い物に行きましょう。真珠を忘れないよう
にしてください」と言いました。

おかみ すじょう き いちば い あいだ いろいろ
女将はゆきの素性が気になるのか、市場に行く間に、色々
しつもん
と質問をしました。

さどう まな - おかみ き
「どちらで茶道を学んだのですか」と女将は聞きました。

じつ そぼ ちゃ ゆ なら こた
「実は、祖母から茶の湯を習いました」とゆきは答えました。

かあ どう おかみ き
「お母さんや、お父さんは？」と女将は聞きました。

はは ちち わたし う ま な -
「母も父も私が生まれてから間もなく亡くなりました」と
ゆきは答えました。
こた

「そうですか。あなたは今、おいくつですか」と女将は聞きました。

ことし じゅうななさい - こた
「今年で十七歳になります」とゆきは答えました。

「そうですか。お祖母ばあさんのお名前なまえを教おしえていただけませんか」と女将おかみは聞ききました。

ゆきがお祖母ばあさんの名前なまえを教おしえた頃、最ころ初の店さいしょに到みせ着とうちやくしました。

女将おかみが「その名字みょうじ…」と尋たずねかけた時とき、番頭ばんとうが店先みせに現あらわれました。「あっ、番頭ばんとうさん、こちらはうちの新あたしい腕利うできの茶道家さどうか、ゆきさんです」と紹しょうかい介かいしました。

それから女将おかみは次々つぎつぎと店みせを巡めぐって、ゆきを商しょうにん人しょうかいに紹しょうかい介かいして回まわりました。

ほどなくすると、新あたしい茶道家さどうかについて、町まちの住じゅう民みんが皆みな口くちにするようになりました。温おん泉せんに行いってゆきの茶ちゃの湯ゆを見みた人々ひとびとは皆みなおどろき、ゆきの茶ちゃの湯ゆの腕うでを褒ほめました。その後あとの数すう日じつ間かん、温おん泉せんはかっにぎつてないほど賑にぎやかでした。